

## 「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第8巻 アフリカ研究

著者	三島 禎子
図書名	梅棹忠夫：知的先覚者の軌跡 = Umesao Tadao : an explorer for the future. 特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会編.
開始ページ	136
終了ページ	136
出版年月日	2011-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009132">http://hdl.handle.net/10502/00009132</a>

## アフリカ研究



\* サバンナの記録  
\* アフリカ研究の回顧と展望  
\* ダトーガ族の研究 \* 狩猟と遊牧の世界

一九六三年から六四年にかけて、梅棹忠夫は今西錦司を隊長とする京都大学アフリカ学術調査隊の一員として、タンザニアにおいて牧畜民の人類学的調査研究をおこなった。本書は、生活体験を記した「サバンナの記録」、日本におけるアフリカ研究を概観した「アフリカ研究の回顧と展望」、牧畜民の民族誌を描いた「ダトーガ族の研究」、岩波市民講座でおこなった講義の記録である「狩猟と遊牧の世界」の四部から構成される。これらは、梅棹によるアフリカ研究の成果であるとともに、モンゴルに始まった牧畜研究の理論的な集大成に位置づけられる。

梅棹のたどった研究の足跡は、日本の人類学研究の発展に重ねられる。戦前のモンゴルにおける牧畜社会の研究は、戦後、調査地を西アジアに求め、さらにアフリカの東端に達する。当初、日本人研究者によるアフリカ研究は自然人類学が中心であったが、一九六五年、今西の定年のあと、梅棹は京都大学人文科学研究所における社会人類学部門を担当し、「アフリカ社会の研究」という研究班を立ち上げ、他大学の研究者とともに、アフリカ研究をすすめることになった。その成果は、日本民族学会やアフリカ学会などにおける報告や、さまざまな学会誌や商業出版、講演をとおして、積極的に発表された。

民族誌の方法論は、生態学的な視点にもとづいた詳細なスケッチによる対象社会の描写と、語彙の収集と記述による文化的側面へのアプローチをとる、緻密なフィールド・ワークを基本としている。牧畜研究においては、ダトーガの社会組織がウシの群れのモデルを反映したものであるという仮説を導きだし、人間の文化や社会的特徴が自然の諸法則と密接な関係をもつことを示唆するなど、牧畜研究のみならず、文化人類学研究に大きな方向性を示した。

梅棹の観察眼は、直接の調査対象にとどまらず、日々の生活における何気ない出来事におよび、そのような何事にも興味を抱く志しこそが、地域や分野をこえた「文明学」を構築する根源になったのだろうと思われる。(三島禎子)